

慎到の思想について：春秋及び戦国初期における強 大国の地域的思想傾向（一）

著者	緒形 暢夫
雑誌名	漢文學會々報
巻	21
ページ	6-14
発行年	1962-05-25
URL	http://doi.org/10.15068/00148537

慎到の思想について

——春秋及び戦国初期における 強大国の地域的思想傾向——

緒 形 暢 夫

一、序

二、慎到思想の概要

三、晋・趙地域性

四、まとめ

(一)

本稿は、春秋時代及び戦国初期における強大国の地域的思想傾向考究の一環として、趙(晋)人慎到の思想を採りあげるものである。

言うまでもなく、慎到は、古来韓非・商鞅等と共に法家の代表的人物と目されており、

史記に、

(1)自騶衍、與齊之稷下先生如淳于髡・慎到・環淵・接子・

田駢・騶夷之徒、各著書言治亂之事、以干世主。(史記)

孟子荀卿列伝

(2)慎到趙人、田駢・接子齊人、環淵楚人。皆學黃老道德之術、因發明序其指意。故慎到著十二論。(同)

とあるが如く、前三四〇年頃、諸子に伍して一家を成したもののようである。ただ、彼の著書、つまり史記でいう十二論、漢志でいう慎子四十二篇(法家者流の項)は、唐以後殆んどが散佚し、今日は、その残篇なり、佚文なりとされるものが数篇あるにすぎず、従って、所説の全貌には、現在接することが出来ないものである。

さて、本稿は、残篇とされる慎子の威徳篇以下七篇、並びに佚文(守山閣本による)等を手がかりとし、加うるに地域的社会的背景を以てして、地域性の観点(注1)からの考察を試みる次第である。

(二)

まず、右の資料に拠り、慎到の思想のあらまし、並びに疑問点についてのべたい。何分資料は断片的ではあるが、内容は多岐にわたっており、一応あるがままを要約すると、彼は、(一)勢(一)權力、(二)法、(三)社会、(四)事物の自然等を尊重し、以て一家言を成したものと見做される。すな

わち、

(一)に關するもの。

(3) 騰蛇遊霧、飛龍乘雲、雲罷霧霽、與蜥蜴同、則失其所乘也。故賢而屈於不肖者、權輕也。不肖而服於賢者、位尊也。堯爲匹夫、不能依其隣家。至南面而王、則令行禁止。由此觀之、賢不足以服不肖、而勢位足以屈賢矣。(慎子威德)

(4) 慎子曰、飛龍乘雲、騰蛇遊霧、雲罷霧霽、而龍蛇與蟻蜋同矣、則失其所乘也。賢人而詘於不肖者、則權輕位卑也。(韓非子難勢)

(二)に關するもの。

(5) 君人者、舍法而以身治、則誅賞予奪從君人出矣。然則受賞者雖當、望多無窮、受罰者雖當、望輕無已。…故曰、大君任法而弗躬、則事斷於法矣。(慎子君人)

(6) 有法度者、不可巧以詐僞。(慎子佚文)

(7) 慎子蔽於法而不知賢。(荀子解蔽)

(三)に關するもの。

(8) 古者、立天子而貴之者、非以利一人也。曰、天下無一貴、則理無由通。通理以爲天下也。故立天子以爲天下、非立天下以爲天子也。立國君以爲國、非立國以爲君也。(慎子威德)

(9) 法非從天出、非從地出。發於人聞、合乎人心而已。(慎子佚文)

(10) 民雜處而各有所能者不同、此民之情也。大君者太上也。兼育者也。下之所能不同、而上之用也。是以太君因民之

能爲賢。(慎子因循)

(四)に關するもの。

(11) 慎到棄知去己、而緣不得已、冷汰於物、以爲道理。…與物宛轉、舍是與非、苟可以免、不師知慮、不知前後、魏然而已矣。(莊子天下)

(12) 天道因則大、化則細。因也者、因人之情也。人莫不自爲也。化而使之爲我、則莫可得而用矣。(慎子因順)

さて、これで見、慎子思想の主要は整理されたようではある。併しながら、一旦、何故(一)・(二)の如く「權力」や「法」を強調した反面、(四)の如く「自然への因循」を唱えたのか、つまり、何故いわゆる法家的色彩のみならず、道家的色彩をも併せもったのか、ということになると、なお検討の余地があるように感じられる。さらに細かく触れるならば、先秦諸子の慎子評にも、検討の余地が見出だされてくるのである。例えば、(一)の「勢」に対する韓非の見解としては、

(13) 夫勢者、名一而變無數者也。勢必於自然、則無爲言於勢矣。吾所爲言勢者、言人之所設也。今日堯舜得勢而治、桀得勢而亂、吾非以堯桀爲不然也。雖然非一人之所得設也。夫堯舜生而在上位、雖有十桀紂、不能亂者、則勢治也。桀紂亦生而在上位、雖有十堯舜、而亦不能治者、則

勢亂也。…此自然之勢也、非人之所得設也。若吾所言、謂人之所得勢也而已矣。…吾所以爲言勢者、中也。中者、上不及堯舜、而下亦不爲桀紂、抱法處勢則治、背法去勢則亂。…夫奔隱括之法、去度量之數、使奚仲爲車、不能成一輪。無慶賞之勸刑罰之威、釋勢委法、堯舜尸說而人辯之、不能治三家。夫勢之足用亦明矣。(韓非子 難勢)

の如きものがある。この慎到・韓非の「勢」論を比較すると、韓非は、自然のままの「勢」は論外に付するものであり、いわば難じておるとも見られるし、慎到は、別段「自然」とか「人為」とかに、捉われていないようであり、どちらかと言えば、あるがままの「勢」を重視するという気配が感じられるのである。従って、この微妙な相違についても問題が残されていると考えられるのである。また、(四)の(1)に関しては、莊子は統けて、

(14) 豪傑相與笑之曰、慎到之道、非生人之行而至死人之理。…。慎到不知道。雖然、槩乎皆有聞者也。(莊子 天下)

という。これも一見、何気ない批判程度に見做せもする。だが、慎子思想には、法家的色彩もあることや、この「道を知らず」という評などを考え合わせると、これもまた一概に看過出来ないように思われてくるのである。むしろ、慎子思想の真面目理會の上で、深長な意味をもつように感じられるのである。さらに言うならば、慎子の「棄知去己」という点は、老莊の言う「道」思想に通じたもののようで

あるが、しかし、「道」そのものの究明においては、迫力に乏しく、従って、いわゆる道家とは少なからぬ径庭が存したもののように思われるのである。この外では、荀子が「上則取聽於上、下則取從於俗。」(荀子 非相)という。これからすれば、慎子の思想は、一見、捉えどころのないものとも見做されたようであり、その理由についても、何等かの補いが必要のように感じられるのである。

このように慎子思想を見ると、先に整理したままでは十分でない、つまり表面的特色は指摘できても、内面的真面目は把握できない。そして、いわゆる百家争鳴の間における一家言として、彼の赤裸々な思想根柢をも、改めて究明してみることがあるように感じられてくるのである。

(三)

ここで、焦点を慎到の生地と言われる趙地域に移したい。ところで、この趙は、春秋・戦国の交に、強国晋が趙・韓・魏に三分した際、独立国の体を成したものであるが、その晋地域の主要精神は、特に趙地に遺存された如くである。それは例えば、

(15) 種・代。…。自全晉之時、固已患其標悍。而武靈王益厲之。其謠俗猶有趙之風也。(史記 貨殖列傳)

(16) 太原。…。又多晉公族子孫。(漢書地理志下) によってもその一端は窺えよう。従って、まず趙国の前身つまり春秋時代の強大国の一たる晋国の考察を試みたい。

さて、この晋の政治面を見ると、ほぼ外形的には、覇者乃至強大国としての体裁を具えたようではあるが、内面的には、非情・殺伐の氣風が流れ、極めて不安定な状態で終始したものと見做される。例えば、

(17) 初、晉穆公之夫人姜氏、以條之役生太子、命之曰仇(文)。

其弟、以千畝之戰生、命之曰成師(桓)。

晉潘父弑昭侯(文)公、而納桓叔、不克。晉人立孝公(昭)公。

惠之四十五年、曲沃莊伯(桓)叔伐翼弑孝公。翼人立其弟鄂侯。(桓)二

鄂侯。(桓)二

(18) 曲沃武侯(莊)伯伐翼、次陘庭。韓萬御戒、梁弘爲右、逐翼侯于汾濕。(桓)三

翼侯于汾濕。(桓)三

(19) 曲沃伯誘晉小子侯殺之。(桓)七

(20) 春、滅翼。(桓)八

(21) 王使虢公命曲沃伯、以一軍爲晉侯(武)公。(莊)十六

(22) 晉桓莊之族偪。獻公(武)公之患之。士蒍曰、去富子則群公子可謀也已。公曰、爾試其事。士蒍與群公子謀、譖富子而去之。(莊)二十三

(23) 晉士蒍使群公子盡煞游氏之族、乃城聚而處之。冬、晉侯圍聚、盡殺群公子。(莊)二十五

(24) 將殺里克、公(惠)使謂之曰、微子則不及此。雖然、子殺二君與一大夫。爲子君者、不亦難乎。對曰、不有廢也、君何以興。欲加之罪、其無辭乎。臣聞命矣。伏劍而死。

(傳)十

(傳)十

(傳)十

(傳)十

(傳)十

(傳)十

(25) 初、麗姬之亂、詛無畜群公子。自是晉無公族。及成公即位、乃官卿之嫡而爲之田、以爲公族。(宣)二

の如き、長年にわたる支配層間の乱脈が、よくそれを物語る。つまり、終始いわゆる内部的道德は輕視されて、人の氣風は勢のおもむくままに、どちらかと言えば、力の正義である方向へと、傾いていたと見做されるのである。

次に、この地域の地理的事情を見ると、その地の僻遠、山岳地帯等の諸条件もさることながら、特に異民族との接触、ならびにそれからする氣風への影響が注目される。すなわち晋では、

(26) 晉居深山、戎狄之與隣、而遠於王室、王靈不及。(昭)十五

(27) 白狄及君(秦)同州。君之仇讎而我(晉)婚姻也。(成)十三

(28) 潞氏(狄)嬰兒之夫人、晉景公之姉也。(定)十五

(29) 戎子駒支對曰、。賜我南鄙之田、狐狸所居、豺狼所

嗥。我諸戎除翦其荆棘、驅其狐狸豺狼、以爲先君不侵不叛之臣、至于今不貳。昔文公與秦伐鄭、。晉禦其上、戎亢其下、秦師不復、我諸戎實然。譬如捕鹿、晉人角之、諸戎掎之、與晉踣之。戎何以不免。自是以來、晉之百役、與我諸戎、。我諸戎飲食衣服、不與華同、贊幣不通、言語不達、。(襄)十四

(30) 晉獻公娶于賈、。又娶女於戎。犬戎狐姬生重耳、小戎子生夷吾。(莊)二八

(31) (重耳)遂出奔狄、。狄人伐廆咎如、獲其二女叔隗季隗、

納諸公子。公子取季隗、生伯鯨。(傳三)

(左伝)

(82) 和戎有五利焉。戎狄蕃居、貴貨易土。土可賈焉、一也。

邊鄙不聳、民狎其野、穡人成功、二也。戎狄事晉、四隣振動、諸侯咸懷、三也。(襄四)

(左伝)

の如く、異民族とは、時には婚姻の対象、時には侵略の対象、時には外戦の盟友として、終始密接な関係にあったようである。ところでこの晋は、

(83) 唐在河・汾之東、方百里。(史記)

(晉世家)

(84) 虞・虢・焦・滑・霍・楊・韓・魏、皆姬姓也。晉是以大。

若非優小、將何所取。武・獻以下、兼國多矣。(襄二十九)

(左伝)

(85) 南則荆・吳之王、北則齊・楚(誤か)之君、始封於天下之時、

其土之方、未有至數百里也。人徒之衆、未有至數十萬人也。以攻戰之故、土地之博、至有數千百里也。人徒之衆、

至數百萬人也。(墨子)

(非攻中)

(86) 晉侯作二軍。公將上軍、太子申生將下軍、趙夙御戎、畢

萬爲右、以滅耿、滅霍、滅魏。(閔元)

(左伝)

の如く、元來は彈丸黒子の地にありながら、やがて諸地を侵略し、覇者の座へと進んだものである。従つて、上記諸例の異民族、つまり特に戦力源としての異民族の意義は、極めて大であつたと想像されるのである。それは、一見、他の強大国、例えば齊が東夷を利し、楚が南蛮を利し、秦が西戎を利したのに似るものの、齊や楚がなお経済力、秦がなお農戦の備えを、根幹としたものとは、大いに趣を異

にしたものである。

このように、異民族との特殊関係をもつた晋としては、彼等に対するに婚姻その他による懷柔策もさることながら、特に力の用意は不可欠であつたものと見做される。すると、結局、地理的要因もまた「力」尊重等の氣風醸成に大きく作用したものと、考えられるのである。

次に經濟面から考えてみたい。老子に、「大兵之後、必有凶年。」(第三)とある如く、侵略・大戦・内乱に終始したこの地の經濟は、極めて不安定のものであつたと、考えられる。「任俠爲姦。」(史記)・「不事農商。」(同上)・「好射獵。」(漢書地理志下)・「仰機利而食。」(史記)・「作巧姦治。」(同上)等の記

録は、主に北方地域の様相を物語るが、そこはまた晉・趙の實質的核心的地域であつたが故に、この地の氣風には、少なからぬ影響を与えたと考えられる。つまり農業地帯における保守的人情的なものとも言えず、商業地帯における流動的合理的なものとも言えず、ただ、前記諸要因とも関連して、非合理的な「俗っぽい仁義」とか、「力」とかで、生活均衡が保持されるとする傾向等を、助長したと考えられるのである。次の、

(87) 種・代石北也。地邊胡、數・被寇。人民矜懷悵、好氣任俠爲姦、。然迫近北夷、師旅丞・往、中國委輸、時有奇災。。自全晉之時、固已患其懷悍、而武靈王益・厲之。(史記)

(貨殖)

(38) 太原……又多晉公族子孫。以詐力相傾、矜夸功名、報仇過直、嫁取送死奢靡。漢興號爲難治、常擇嚴猛之將、或任殺伐爲威。父兄被誅、子弟怨憤、告訐刺史二千石、或報殺其親屬。(漢書地理志下)

(39) 中山……俗懷急、仰機利而食。丈夫相聚游戲、悲歌慷慨、起則相隨椎剽、休則掘冢、作巧姦治、多美物。爲倡優女子、則鼓鳴瑟、跕屣、游眉貴富、入後宮、徧諸侯。(史記貨殖)の如きは、よくその様相を物語るものと言えよう。

以上、晋地域の地域性を、政治・地理・経済の面から概観したのであるが、それらを総括すると、人間個々の内部的徳性が尊重される雰囲気ではなく、また神の意志、あるいはそれに基づく道徳が標榜される状態でもなく、さりとて変化する社会そのもののみに、身を任しきれる状態でもなかった、と言える。各地域を概観比較すれば分かる如くかかる状態は、他地域には見難い特色である。従って、この地の精神も、また自ら独特のものが醸成されたであろうことは、容易に想像されるところである。さて、その一つとしては、先に触れた如く、(37)・(38)・(39)に見られる粗野な武力尊重の傾向があげられよう。また、次の夢説話なり、君主観なりから推想できる、權威に対する見方も、特色の一言と言えよう。この夢説話とは、例えば、

(40) (晉) 唐叔虞者、周武王子、而成王弟。初武王與叔虞母會時、夢、天謂武王曰、余命女生子名虞、余與之唐。及生

子、文在其手曰虞。故遂因命之曰虞。武王崩、成王立。唐有亂、周公誅滅唐。成王與叔虞戲、削桐葉爲珪、以與叔虞曰、以此封若。史佚因請擇日立叔虞。成王曰、吾與之戲耳。史佚曰、天子無戲言。言則史書之、禮成之、樂歌之。於是、遂封叔虞於唐。(史記晉世家) (昭一)

(41) (晉侯) (景) 夢、大厲被髮及地、搏膺而踊曰、殺余孫不義。余得謂於帝矣。壞大門及寢門而入。公懼入于室。又壞戶。公覺、召桑田巫、巫言如夢。公曰、何如。曰、不食新矣。公疾病。求醫于秦。秦伯使醫緩爲之。未至、公夢、疾爲二豎子曰、彼良醫也。懼傷我。焉逃之。其一曰、居盲之上膏之下、若我何。醫至。曰、疾不可爲也。在盲之上膏之下。攻之不可、達之不及、藥不至焉、不可爲也。公曰、良醫也。厚爲之禮而歸之。六月丙午、晉侯欲麥。饋人爲之。召桑田巫、示而殺之。將食、張。如廁、陷而卒。小臣有晨夢負公以登天、及日中、負晉侯出諸廁。遂以爲殉。(成十左傳)

(42) 姬謂太子(申)曰、君夢齊姜、速祭之。太子祭于曲沃。(僖四左傳)

(43) 中行獻子將伐齊。夢、與厲公訟弗勝。公以戈擊之、首隊於河。跪而戴之、奉之以走、見梗陽之巫臯。他日見諸道、與之言、同。巫曰、今茲、主必死。若有事於東方、則可以逞。獻子許諾。(襄十八左傳)

の如きものであつて、いずれも、その夢の啓示が実現した

り、あるいは人々がみな、その啓示を固く信じた、という底のものである。かつ、かかる説話は、春秋時代を通じて、晋（戦国時代に趙）地域に圧倒的に多いのである。参考までに、左伝・史記に拠って、その数を統計すると、多少重複するが、ほぼ次のようになる。

	左伝	史記	計
晋	16	韓・晉・趙・魏・趙 08	24
魯	4	0	4
衛	3	1	4
鄭	2	1	3
宋	2	0	3
楚	1	0	1
曹	1	1	2
齊	0	0	0
秦	0	0	0

(注2)

次に君主觀を見ると、

〔44〕晉欒書・中行偃使程滑弑厲公。…使荀息・士魴逆周子于京師而立之。…周子曰、孤始願不及此。雖及此、豈非天乎。抑人之求君、使出命也。立而不從、將安用君。二三子用我今日、否亦今日。共而從君、神之所福。(成十八左傳)の如きもので、これは極端な例かも知れないが、君は衆庶(顯族たち)の意志に依り、廢立される傾向を示している。そして、君主は衆庶の意志を、その組織力によって施行する、いわば機関的なものにすぎないことを意味しているようである。(これを後の趙の武靈王が、胡服を採用した例④と

併せ考えると、この周子の言辭も、単なる偶然と見做せないと考えられるのである。)

さて、これら夢說話等から推すと、晋人は、万象を支配する神の存在は認めるが、その意志は不可知のものとしてみたり、人的權威つまり君主個人は輕視したりしたものといふ見做すことが出来る。そして、武力重視の傾向とも相關連して、一応、あるがままの社会を、神意のあらわれと見て重視し、かつ、特に当面の現状社会を牛耳る組織的權力に不可思議な神的威力を見出だすようになっていたものと、見做されるのである。これは、魯・宋において、天・神意に基づくとした經典・道德等、鄭において、人間的術數、齊において、社会經濟、秦において、君主の意志を、それぞれ重視した傾向等々と、大きく趣を異にしていると言えよう。

以上の如き「不可知の神」意識を中核としての、人生並びに社会に対する理會、そしてさらに、「粗野な武力」尊重に終始した処世の態度、これが晋地域における思想傾向の根柢、換言すれば、晋における地域的精神の大きな特色と言えるであろう。

さてここで、かかる晋人精神と趙人精神との関連に論及したい。言うまでもなく、広狹の差こそあれ、趙地域はかつての晋国の實質的主要地域であり、かつ、特に辺境に位置しての異民族との接触は、依然として晋代同様、大きな

特色をなしていたものである。(例えば、趙の武靈王の④

「於是、始出胡服令也。…先王不同俗、何古之法。帝王不相襲、何禮之循。…故齊民與俗流、賢者與變俱。故諺

曰、以書御者、不盡馬之情。以古制公者、不達事之變。循法之功、不足以高世。法古之學、不足以制公。子不及也。

遂胡服招騎射。」^{史記}趙世家の如き、胡俗採用の態度に、その一端を窺うことが出来る。)さらに、この趙地を支配した趙

氏一族は、かつて晋の制覇・守業に寄与した趙衰・趙盾・趙簡子らの後裔という深い関係が存する。この他、経済的特性も晋代と大差は見られず、従って、強国晋の主要精神はそのまま趙に伝わり、趙人精神としていよいよその特色を濃くしたものと、理合されるのである。先の③⑦・③⑧・③⑨に見える経済・氣風等、さらに夢說話統計等々は、まさにこの間の事情を、よく反映しているものと見做せよう。

(なお、趙と共に晋を三分した韓・魏両地域は、共に諸国間に介在し、外方への発展性に欠けていたり、他国を合併——韓は鄭を滅ぼした後、——したりした等、趙あるいはかつての晋と、その地域性において、大いに趣を異にしたものである。)

(四)

再び論点を慎子に戻したい。史記によれば、趙人慎到は、後には齊地に身を寄せたようである。従って、彼の思想がその地の社会重視の傾向に影響され、助成されたであろう

ことは、多分に想像されるところである。併しながら、上述の内容からして、その影響はほぼ量的の範囲に止まり、彼の思想の大すじ、換言すれば思想の根本は、趙(晋)人精神のあらわれと見做せるようである。この点、他の諸子がそれぞれ地域的傾向を帯びたと見做せる^(3注)ものと、同様であると言えよう。

されば、先に指摘した慎子思想の特色、例えば、社会を重視し、事物の自然を尊重する態度であつたことの如きは、ここで改めて納得がゆくものである。また、いわゆる「道」の論究において、老莊のそれに比し、やや消極的氣配が感じられた所以も、納得がゆくのである。さらにまた、政治上賢智を排するに、ただあるがままの「勢」を以てしたらしい氣配も、理合されてくるのである。なお、彼は他の面で、「法」をも強調したようであるが、彼の法思想には、社会、「俗」間のしきたりの制度化という傾向が、窺われるのであり、従って、右の事物の自然、あるがままの權力尊重等の思想と、基調的に扞格することはないようである。かつ、力による国家統制が要請された地域での思想であつてみれば、別段異とするには当たらないようである。この点術数を弄した鄭人の流れを汲んだため、完全には人間的作為から脱しきれなかった韓非の、「法」・「勢」説とは、根柢的に峻別されるものと言えよう。さらにまた、荀子が、「慎子は、上は聴を上に取り、下は従を俗に取る。云々。」

(4)注と評したのは、蓋し、その一面を衝いた評と見做されてくるのである。

なお、かかる地域での主な人物としては、他に例えは荀子もあげることが出来るようである。この荀子は、慎到よりも時代的に遅れ、かつその学説は、伝統的色彩(彼の場合はいわゆる儒家)の濃い思想家と目せられるものである。併しながら、彼の思想には、例えば、天と人事とを切り離したり、性を悪と強調したり、あるいは、法をも勢をも配慮したりするなど、多分に独自の色彩も見受けられるものである。さて、このような特色の成立については、いわゆる老莊思想、あるいは現実世相の影響などが、その所以を成したかのようでもある。ところで、これを本稿の見地からすれば、また次のように理會される。①まず、勢や法が配慮されたのは、上述の如き基調としての地域精神そのままが、つよく働いたことにあると言えよう。②次に、性が悪とされたり、天意が人事から遠ざけられたりしたのは、基調たる地域の流變的意識が考慮されつつ、伝承的教化主義の維持が計られたことにあると思われる。(蓋し、性を善とするのでは、地域の從俗的傾向等におされて、教化主義も不安定化するが、反対に、性を悪とすれば、そこで始めて教化の意義が安定することにあつたかと思われる。)またこの性惡觀によつて、基調たる神不可知意識はより強められ、つれて伝承的天意思想が、人事から次第に切り離され

るようになったと見做されるのである。以上は要約であり、かつ荀子思想の一端を採りあげたにすぎないが、ともあれ、慎子と同様、荀子の学説にあつても、この晋・趙)人精神の占めた意義は極めて大であつたように思われるのである。

[注]

(1) 拙稿「春秋及び戰國 弱小国の地域的精神について」(昭和三十四年度東京教育大学文学部紀要)参照。

(2) この夢說話に対しては、「問、六國世家、其紀事、莫如趙之誣謬者。不特賂岸賈一事也。…是盡當芟除者也。」(金祖聖、經史の如く、疑いかつ偽妄ときめつけろ見解もある。併しながら、その論拠は明らかではなく、無難作にはうべないがたいものを感じろ。かりにその夢說話が偽妄であるとしても、それがことさらにこの地域に托されたという、その所以は一考に価する。むしろ見逃せないことかと思われろ。つまり、この地域には、托されるにふさわしい地域精神が内在したことによると思われるからである。また、上述の如き、戦乱・經濟の不定等による不安感を併せ考えれば、特にこの地において、夢說話が発生し流行すること、あながち一蹴に付する事柄ではないようにも思われる。いずれにせよ、ここは夢說話そのものを目的とするのではなく、あくまで手段と目するが故に、一応あるがままに取り扱つた次第である。

(3) (1)に同じ。

なお、嘗て慎到思想に触れた際、晋地域との関連は省略したのでここで改めて補訂する次第である。

(4) この部分を解するに、唐の楊倞は、「言荀順上下之意也。」(荀子)といひ、清の王念孫は、「取聽取從、言能使上下皆聽從之耳。」(讀書雜誌)という。解釈上二者択一となると、問題が存すると思うが、思想上では、本稿の見地からすれば、慎子の一特色を原因因に見たと、結果的に見たとのちがいにすぎないことになる。

(東京教育大学助手)